

第一章
人類の誕生と日本人の先祖



▲猿人の復元像（メキシコ国立人類学博物館蔵）

はじめに

私の生まれ育った紀の川市桃山町調月の歴史を遡って調べていると、古代「吉仲莊調月」の地名決定に関わった菅吉永(吉仲麻呂)や調月邑を拓いた紀男麻呂宿禰は古代の韓半島と深く関わっていたことも分かった。国語では「つかつき」と読めない「調月」の地名も、ハンブルで「エスケキ」と書き、「ツカツキ」と読めることを見いだした¹⁶⁰⁾。

「紀州那賀郡調月邑大歳明神縁起」によると、欽明天皇の皇子吉仲麻呂が当地に棲んだ千四百数十年前頃、宮尾帝林御食地にも一舎を建て陸遊の処となし、詩歌の日々を送り云々、土民親しみ家を移して里をなす¹²²⁾とある。

調月近辺の縄文時代の小林遺跡から狩猟や争いに使われたと見られる石鏃が出土し、調月の城ノ壇遺跡や上尾遺跡からは石鏃や弥生式土器が出土している¹⁵⁹⁾ことから、当地には縄文、弥生の時代からすでに人々が住んでいたであろう。城ノ壇や上尾遺跡周辺では、つい最近まで

雨上がりの田畑で石鏃を拾えたと聞いた。

人類がいつ頃誕生し、私たちの先祖はいつ頃、どこから来て、この地に住みついたのであろうか。

日本列島に住みついた人々、石器・縄文・弥生時代の先祖に思いを馳せてながら古代を尋ねることは、現在の地名や慣習、先行き不透明な将来を考える為にもあながち無駄ではないと思う。

日本の古代史は、往古から関係の深かった中国大陸や韓半島諸国の史書によって修正・補完されてきた。歴史を証明する現在の考古学、神社伝承学、天文学、言語学、人類学やDNA考古学が総動員され、年代測定法としての放射性炭素(C¹⁴)分析による年代特定、さらにその手法改良により、約六万年前迄測定可能とされるAMS分析法等によって考証されるようになった。

またコンピュータによる画像解析の手法を駆使し、石に書かれた古代人の墓誌の解読もすすみ、歴史人物の在世年代が特定されている^{31),59)}。

往古から日本列島には北から南から、そして韓半島や中国大陸から日本海沿岸および太平洋沿岸にそって海洋航海民族が黒潮の流れに乗って移住してきたとみられている。

古事記・日本書紀はもとより、紀元前数百年にも遡る記録を残す中国の「史記」や「漢書」、「三国志」等、また韓半島の「三国史記」なども参照し、最近の考古学成果や考古資料を紐解きながら、私たち先祖の移住と定住、そして古代日本人の生活状況や歴史を尋ねてみようと思う。

サルから進化した人類

サルの中でもヒトに特に近縁なグループは大型類人猿と呼ばれている。今から千五百万年前ごろのアフリカには、様々な種類の類人猿たちが暮らしていた。これら類人猿の中のあるグループが、およそ六百万年前に新しい方向へ進化し、ヒトの祖先となったと云われている。

現在生きている大型類人猿は、チンパンジー、ボノボ（ピグミーチンパンジー）、ゴリラ、オランウータンの四



種。ヒトの祖先もこのような

大型類人猿の仲間だった¹⁶⁾。

2004年12月に放映されたNH

Kの「地球大進化四十六億年の歴史」によると、人類の先

祖となった類人猿も、もとは藻類かアミーバのような生物から鱗をもつ魚へ、そして手のある両生類に、さらに地上に生活するようになった獣へと進化を繰り返して猿が生まれ、それらから進化したものという。

先祖はアフリカで誕生した

私たち人類の祖先となる集団が日本列島へ最初にやって来たのは、今から四く三万年前だったと考えられている¹⁶⁾。彼らは、およそ十万年前にアフリカで誕生した新人（ホモ・サピエンス）の直接の子孫だった。日本列島に

ンモスの大陸」とも呼ばれた地域である。

アフリカで誕生した人類が、なぜ、この酷寒こっかんのシベリアをめざしたのだろうか。人類史の七不思議のひとつである。しかし、二万年以上前の旧石器時代、技術開発と創意工夫によって寒さに挑戦し、ついには寒さを味方にして、シベリアでマンモスを狩って暮らしていた人々がいたのである。そして、彼らが私たちの祖先集団の一つであったことが近年の研究¹⁶⁾で明らかにされている。

黒潮の民―スンダランドからの旅立ち―

およそ六万年前にアフリカを出発し、東南アジアにやってきました新人（ホモ・サピエンス）たちは、海面の低下によって生じた広大なスンダランド(SUNDA LAND、インドネシアとその周辺を含む亜大陸)を発見した。彼らは、気候がよく豊かな食物資源に恵まれていたスンダランドで人口をふやし、次への発展に備えてきた¹⁶⁾と云われている。

スンダランドは、平成十六年十二月二十六日、日本時間午前十時過ぎのスマトラ島沖大地震によって周辺各国で十五万人を超える死者を出したインドネシア周辺だった。



ある人々は海を越え、東隣のサフルランド（オーストラリアとニューギニアを含む大陸）へと旅立った。ま

た、陸を踏破し海を越え何世代もかかって、中国や日本列島にやってきた人々もいたであろう¹⁶¹⁾と云われている。

成熟する縄文文化

およそ一万年前の完新世になると、黒潮の分流が対馬海流となつて日本海側にも進入し、現在と同じように温暖湿潤なモンスーン気候が広く日本列島を覆ってきた。

各地に実り多い恵みをもたらす森林が発達した結果、陸海のさまざまな食料資源を活用し、豊かな文化を育む縄文人の生活が始まった²⁴⁾という。

南九州では豊かな照葉樹林^{しやうようじゆりん}のなかで大集落(上野原遺跡)が発展したが、約六千五百年前の鬼界カルデラの巨大噴火で、南の縄文文化は消滅した。

青森県では、対馬海流を利用した海の交易センター(三内丸山遺跡)が成立し、北海道礼文島には貝アケセサリ¹⁶¹⁾の工場(船泊遺跡)まで存在した¹⁶¹⁾ことがわかっている。

旧石器時代

旧石器時代とは、人類が旧石器を作り始めた約二百五十万年前から、新石器を作り始めた約一万年前までのこと。ただし、人類が誕生した約六百万年前から二百五十万年前の期間も含めることがある。

地質学上の第四期洪積世に相当する¹⁶²⁾と云う。一般的に、旧石器時代は旧大陸の旧石器文化に基づく考古学区分により、前期(下部)、中期(中部)、後期(上部)の三期に分けられている。日本列島では、現在のところ確かな旧石器文化は約四〜三万年前頃の後期段階しか確認されていない¹⁶¹⁾という。

日本列島の旧石器遺跡は、ほぼ全てが酸性土壌の火山灰(ローム)層に含まれていることから、人骨や動物骨の発見があまり期待できないと云う。したがって、日本では旧石器時代の研究は石器の発掘や年代比定が中心になっている。



▲ 現在型サピエンスの化石と拡散の軌跡 161)

孤立して縄文人、つまり今日のアイヌ人と同系統の人種とみられている。

ところで、平成25(2013)年4月、ヨーロッパの凍り付いたアルプス山中で見つかった古代人の遺体解剖の話がNHKのBSドキュメンタリーで放映された。放映は「アイスマン」と云うタイトルだった。

この遺体は、去る平成3(1991)年9月11日、ドイツのアマチュア登山家夫妻がイタリアとオーストリアの国境近いアルプスを登山中に、温暖化で解けた氷河の一角で偶然に発見したと云う。

地球は約一万年前まで氷河期だった。海水面は今よりずっと低く日本海は巨大な湖で、朝鮮半島と日本列島の間は狭く、川幅ぐらいいのだったと云う。半島と列島の間が大きく分けられたのは地質学的にみて約八千年前と推定されている。

結局、それ以前に列島へと移動した人々は、大陸と

考古学者がC¹⁴法で遺体や付属物の年代を分析した結果、5,300年前(BC^{3,300}年頃)のミイラと特定され、発見後氷点下9℃で冷凍保存されていた。詳しく調査するためにミイラは、このほど解凍して149点のサンプルを採集、分析された。

アイスマンは、体重50kg、身長160^{センチ}の男性で、死亡時に身につけていた衣類や履き物等から、先史時代、つまり青銅器時代の遺体で、日本で云えば縄文時代に相当する。

氷点下の雪中で自然冷凍されていたので遺体の傷や皮膚の状態、胃袋や脳の状態まで保存状態が良く、専門家によって解剖されDNA分析もなされた。皮膚には灸跡を示す痕跡がみられ、満腹の胃袋には動物の脂肪やアイベックス(山岳性野生ヤギ)の毛等が含まれており、検出された煤は焼いたパンの焦げたもので、ハーブの痕跡もあったと報じていた。

こうしたことから、このミイラが住んでいた紀元前^{3,300}

年前に、すでにこの地方では豊かな食生活や医療の痕跡がみられ、人類が採集狩猟生活から進化し農耕生活に進歩した時代の姿が浮かび上がったと報じていた。

倭人の願像

日本列島では、四〇三万年後の後期旧石器時代には人間が住み始めていたことは確実とみられている。しかし、その時代の日本列島全体にどんな人々が住んでいたのかは、まだ良くわかってない。私たちの祖先・倭(和)人の姿をはっきりと見ることができるのは縄文時代から¹⁶⁾という。

新たな民族・弥生人の進入

およそ二千三百年前(BC³⁰⁰年)、西日本には縄文人とはまったく異なった顔だちや身体つきの人々が現れた。渡来系弥生人と呼ばれる人々である。日本列島には、彼らによって新しい水田稲作の技術と金属器の文化が大陸か

ら伝えられ、人々の生活は大きく変化していった¹⁶¹⁾とみられて

そして倭人が生まれた

縄文人は、四角く立体的な顔で、小柄ながら筋肉質の身体つきをしていた。およそ二千三百年前に中国や朝鮮半島から渡来してきた弥生人は、面長で平坦な顔で、大柄な身体つきをしていた。

彼ら渡来系弥生人は、九州北部から日本列島各地に広がり、縄文人と混血しつつ、本土人の主体を形成した。彼らと共に渡来した文化は、在来の縄文文化と融合して、弥生文化を生み出した。

水田稲作技術は食生活だけでなく、倭人(日本人)の意識をも変えていくことになった。

渡来系弥生人の影響が少なかった北海道と沖縄では、それぞれアイヌ人と琉球人が縄文人の姿形を色濃く残しながら、独自の文化を築いてきた。その結果、いま、日本列島には、アイヌ・本土人・琉球人という三つの民族集団が住んでいるわけである¹⁶¹⁾。いま、縄文系人と渡来系人の身体的特徴を対比すると次表の通りである。



▲ 浦入遺跡出土の丸木舟
6,000年前のものともみられている

京都府舞鶴市教育委員会蔵

縄文系と渡来系人の体軀の違い

161)

身体特徴		縄文系人	渡来系人
顔形	四角	丸	丸／楕円
造作の線構成	直線	曲線	
プロファイル	凹凸	なめから	
彫りの深さ	立体的	平坦	
眉	太い	細い	薄い／少ない／半円
ヒゲ	濃い	薄い	
まぶた	二重	一重	
頬骨	小さい	大きい	
耳たぶ	大きい	小さい	貧乏耳
耳アカ	湿る	乾く	粉耳
鼻	広い	狭い	低い
唇	厚い	薄い	
歯	小さい	大きい	
口元	引き締まる	出っ張り気味	
四肢の末端	長い	短い	
体毛	多い	少ない	

渡来系弥生人の顔

頭骨をもとに復元した渡来系弥生人の顔は、面長で、つぺりとした顔立ちである。まぶたは一重で、目は細く、くちびるも薄く、ヒゲなども少なかったと想像されている。このような顔の特徴は大陸の人々にもみられる。

アジア人がシベリアから南下し、中国の大部分に広がっていった。二千三百年前頃には水田稲作の技術とともに、ついに日本列島にもやってきた。彼らこそが渡来系弥生人だった¹⁶¹⁾と云う。



▲ 遺跡から出土した人骨により復元した縄文人と弥生人のイラスト (国立科学博物館 石井礼子氏原図)¹⁶¹⁾

土井ヶ浜遺跡 (山口県の響灘に面する西海岸沿いにある弥生時代の埋葬跡) の弥生人が大陸から渡来してきた人々であったことは、ほぼまちがいない¹⁶¹⁾という。

新人(ホモ・サピエンス)は熱帯で生まれ、やがて徐々に寒冷な気候に適応していった。しかし、シベリアの厳寒気候に適応できたのは、わずか二万年ほど前のことである。体温の発散を防ぐために、身体はズングリし、手足は短くなり、顔の凍傷を防ぐために鼻は低くなり、皮下脂肪が発達して、まぶたは厚く一重になったと考えられている。

やがて、六千年ほど前、このような北方

渡来系弥生人の広がり

弥生時代の中頃(紀元前後)になると、大陸から渡来民が大勢やってくるようになった。しかし、弥生時代の遺跡からみつかっている人骨が、すべて平らな顔の渡来系弥生人というわけではない。当時の日本列島には縄文人の子孫たち、即ち在来系弥生人も住んでいたであろう。弥生時代、西日本に姿を現した渡来系弥生人は、日本列島の東の方では、どこまで広がっていったのであろうか。東日本でも、数は少ないが弥生人骨はみつかった。たとえば、齒の形態からは、関東西部の三浦半島や長野県にも渡来系弥生人が来ていたと推定されている。北海道でも渡来系弥生人の特徴をもつ人骨が一体だけ見つかった¹⁶⁾という。

渡来系弥生人の故郷

さて、渡来系弥生人は大陸のどこからやって来たので

あろうか。

最近の調査により、水稻発祥の地ともいわれている中国南部が有力視されている。黄河下流と長江下流に挟まれた地域の漢代の遺跡から渡来系弥生人に似た人骨がいくつかいついで見つかっていると云う。

この時代の中国大陸は政治的に動乱の時代であり、いろいろな民族が入り乱れて戦っていたという。日本にやって来た渡来民は、このような動乱から逃れてきた人々だったのであろうか。

数千人を連れて渡来した徐福

日本列島の各地37カ所に徐福じよふくの渡来伝説¹⁷⁾がある。遙か昔に中国から不老長寿ふろうちようじゆの薬草を求めて来たという伝説である。

そして中国の古代史『史記』の始皇帝本紀や淮南衡山わいなんこうざん列伝ちてんには、徐福の旅立ちを伝える記録¹²⁵⁾がみえ、また中国人による徐福じよふくの東渡とうとを巡る多くの論証⁷⁾がある。

徐福の渡来については第二章で詳しく考証することとするが、徐福は一族、一団数千人を率いてBC 219年から数回にわたって日本列島に渡来したことが判明した。

そして縄文の日本列島に初めて弥生文明や優れた稲の品種を持ち込んだと考えられる。

ところで、佐賀県唐津市西南部に発見された菜畑遺跡なばたいせきの水田跡は、紀元前六百～五百年頃のものと思われ、当時すでに水田稲作技術が入っていたことが明らかになった。昭和五十五1980年から五十六1981年にかけて行われた発掘調査により、縄文時代前期から弥生時代中期に至る遺跡と確認された。なかでも縄文時代晩期後半(約二千五百～二千六百年前)の水田跡の発掘と付随して出土した数々の農具は、我が国稲作の起源が縄文晩期後半まで遡さかのぼる事が明らかになった。

したがって、稲作は弥生時代に開始されたのではなく、縄文末期には既に定着していた²⁷⁾とみられている。



▲佐賀県唐津市で発見された菜畑遺跡なばたいせきの復元水田



(紀元前600～500年)

古墳時代にも朝鮮半島から大量に渡来

日本人の先祖については種々の学説があるが、最近、人類学や遺伝学の進歩で、縄文人の直系の子孫はアイヌ人であって、アイヌ民族などの少数民族を除いた日本列島の住民の先祖は縄文人ではないことが明らかになった⁴⁸⁾とされる。

日本の石器時代人は「アイヌ」だとする説は、幕末に渡来したドイツの医学者で博物学者でもあったシーボルトが唱え始め、後に小金井良精¹⁶³⁾や鳥居竜蔵¹⁶⁴⁾ら人類学者が、その説を発展させた。

つまり、日本列島にはアイヌが先住していたが、その後、和人(倭人)が大陸から渡来しアイヌは次第に北方に退いたとしている。

アイヌ(aynu)とは、本来「人」の意で、昔の北海道、樺太、千島列島、カムチャツカ半島、本州の北端部に広く先住していた民族を云う。現在は主として樺太・北海道に居住するが、人種の系統は諸説あり明らかでない。古くは

コタンと呼ばれる集落を作り、狩猟や漁を基本とする生活を営んでいた。

しかし近世以降は、北海道南西部、渡島半島南端の松前藩の支配と搾取を受け、明治以降は政府の同化政策によって混血が進み、固有の風俗や習慣、伝統文化の多くが失われ人口も激減した¹⁶⁾と云う。

出土遺物や人骨からみた日本人の先祖

縄文式土器の制作者はアイヌで、弥生式土器の制作は和人の先祖であると云う。即ち日本人の先祖は中国大陸や朝鮮半島から渡来し、縄文人にとって代わったというのである。

しかし、縄文人Ⅱアイヌ説を真っ向から否定した清野兼次らは、岡山県津雲貝塚で発掘された縄文人骨と現在日本人や現在のアイヌなどの骨を比較した結果、津雲人はアイヌと縁が遠いと云う。

津雲人は、和人の先祖「日本原人」だとし、日本列島

は和人の故郷であって和人がアイヌから奪ったものではない。現在アイヌの先祖も日本原人ではあるが、その後、北部の他の人種と混血して現在アイヌが形成されたもの¹⁶⁵⁾と主張した。

しかしその後、清野らの資料を用いて行われた調査で、津雲人がアイヌと縁が遠いとは結論できない⁴⁸⁾と云う。

和人の先祖は、最新世、もしくは新石器時代の初め頃、当時日本列島とつながっていた中国南部から陸路九州に達した。しかしその後、海進によって陸路が海底に没したので隔離状態になった。彼らは山海の幸に恵まれて大いに繁殖し、次第に日本列島全土に広がったが、他の人種と混血することはなかった。縄文人の骨は和人の先祖の骨であって、それ以降、生活様式の変化によって弥生人骨を経て、現在人骨のように変わってきたとし、古代の東北地方の住民、蝦夷を和人とし、和人単一民族説¹⁶⁶⁾¹⁶⁷⁾を唱えている。

アイヌと日本人との人種的境界線は太古以来、津軽海

峡である¹⁶⁸⁾とされてきたが、北海道大学のコンピュータシミュレーションによると、縄文時代の丸木船で津軽海峡を渡ることは予想よりも遙かに容易だと分かったという。また、縄文時代には北海道南部と東北地方北部は同一文化圏にあったばかりか、ウラジオストック・ナホトカなどで発見された黒曜石が秋田県男鹿半島と島根県隠岐島の原産であり、旧石器時代から縄文時代にかけては沿海地方と日本列島の間には日本海を越えて人と文化の交流があったことが証明されている¹⁶⁹⁾と云う。

和人単一民族説が多数を占めていた頃から、渡来説を唱えた小浜基次¹⁷⁰⁾は、和人や周辺種族の生体計測資料をもとに、和人を構成する要素は朝鮮人とアイヌであることを指摘してきた。

また、日本人の起源を遺伝子レベルで研究した宝来聰氏¹⁷¹⁾は次のように考察している。

集団間の近縁度をみる尺度として、塩基多様度のネット値(DA)を利用することができる。アフリカ人、ヨーロッパ

パ人、アメリカ先住民、アイヌ、中国人、琉球人、韓国人、本土日本人、八集団において総当たりで計算したDA値の分布を調べた結果、アフリカ人は、他のどの集団と比較しても大きな遺伝距離をもっている。つまり、本土日本人とは縁が遠いという。

これとは対照的に、東アジアの五集団はそれぞれの集団間の遺伝距離が非常に小さい。特に、韓国人と本土日本人の二集団間の遺伝距離はゼロであった。この分析結果からみても、韓国人と本土日本人は遺伝的にきわめて近縁関係にあることが明らかであるという。

また、集団間で求めた遺伝距離をもとに集団の系統樹を作成した結果、アフリカ人が他の人類集団に先がけて分岐し、続いてヨーロッパ人が分かれ、さらにアメリカ先住民が分岐している。最後に、東アジアの五集団が単一系統のクラスターを形成して枝分かれしてくる。東アジア人のクラスターでは、アイヌが最初に分岐し、続いて中国人が枝分かれしてきたことが読み取れる。

続いて琉球人が枝分かれし、最後に韓国人と日本人が緊密なグループとして分岐してくる。この系統樹で見られた主要な特徴は、従来のタンパク質多型や最近の核DNAの多型によって明らかにされた人類集団間の系統関係と大筋において一致するという。

宝来聰氏¹⁷⁾はまた、日本の三集団(本土日本人・琉球人・アイヌ)と、韓国人や中国人からなる二九三人の東アジア人におけるミトコンドリアDNAの塩基配列のデータの詳細な分析を通して、三つの日本人の集団の遺伝的背景を推理し、現在の日本人がどのようにして形成されたかを考察してきた。

日本以外の東アジア集団の塩基配列のデータを得ることにより、現代日本人の成り立ちの歴史の洞察が可能となる。本土日本人は、縄文人という日本の先住民の子孫と考えられるアイヌや琉球人と、ある程度遺伝的に近い関係にあるものの、本土日本人における遺伝子プールの大部分は、弥生時代以後のアジア大陸からの渡来人に由

来するものであった。

したがって、この結果は現代日本人の起源についての混血説を肯定するものである。さらにアイヌと琉球人はある程度の遺伝的^{遺伝性}近縁性はあるが、弥生期の移住が始まったころには、別々の集団として存在していたと考えられるとしている。

人類集団全体の系統分析によって東アジア人の集団間の、より緊密な遺伝的関係が明らかになった。しかし、たとえばアイヌは東アジアの集団では最初に枝分かれすることから独自の系統と考えられるが、その遺伝的な起源はいまだ明確ではない。今後、さらに東南アジアやシベリア等、多くの地理的なサンプリングによって、私たちは新石器時代の縄文人の現代における子孫としてのアイヌの系統的な位置付けをより深く理解することができ、日本人全体について、より明確なイメージを持てるようになるだろう¹⁷¹⁾と述べている。

中国大陸・韓半島からの渡来者

古代日本列島への海外から渡来者数をシミュレーションによって推理・推測した結果によると、弥生時代の渡来者数は約十万人、古墳時代の渡来者数は約二百六十七万二千人と推計¹⁷²⁾されている。

当時は中国・朝鮮・日本という明確な国境はなく、人々の移動・移住には出入国管理もなく自由に渡来したのであろう。

七〜八世紀の飛鳥・奈良時代になっても、幾度も多くの百済人^{くだら}や新羅人^{しんら}が渡来したことは書紀の記録にみえる。

例えば、天智天皇4(665)年、「春2月に、百済滅亡後に渡来した左平福信・鬼室集斯に小錦下を授ける。また百済の百姓男女400余人を近江国の神前郡に住ませ、この月に神前郡の百済人に田を与える」とあり、同5(666)年の冬に、「百済の男女2千余人を以て東国に置く」⁶⁹⁾、とみえる。

平安時代の弘仁6(815)年に撰上された『新撰姓氏録』

205)に録された畿内(京・山城國・大和國・河内國・摂津國・和泉國)在住の^{1,21,4}姓氏(家)の出自を、先祖別、国別に分類してみると、歴代中国(秦・漢・燕・魏・呉)の国々を母国とする氏族は14.3%、同じく韓半島の百濟9.8%、同じく高句麗(高麗)3.9%、同じく新羅1.4%、同じく任那0.8%、不明3.8%、合わせて30.2%が日本列島以外から渡来した氏姓であることがわかった。

また、書紀が38代天智天皇とする中^{なか}大兄皇子^{おほえ}は、百濟の武王の子翹岐^{キョウキ}21)である。さらに、天智天皇の孫だった光仁天皇が、百濟武寧王の子純陀太子の子孫高野朝臣新笠を側妾として産んだのが桓武天皇であったように、いまの天皇家の先祖は百濟からの渡来者である。

奈良時代から平安時代にかけて政界・政権を支配した藤原氏一族は、百濟から渡来し乙巳^{いっし}(645年)の変を起し、翹岐(書紀名)中^{なか}大兄^{おほえ}とともに大和政権を乗っ取った智積^{シヤク}21)(書紀名(鎌子)の子孫である。

斉明天皇6(660)年の百濟滅亡後に渡来した百濟人の数

は数え切れない程多かった。斉明天皇自身も、百濟武王^{ムワン}の妃(室)であり、その墓誌をみると「宝王天皇」^{31),59)}とある。時代は下るが、コロンブス^{1451頃〜1506}(1506年)は、イタリア生まれの航海者でアメリカ大陸を発見した人物である。彼は、探検家、航海者、奴隸商人でもあった。

スペイン女王イザベラ一世の援助を受け、¹⁴⁹²1492年、大西洋をインドに向けて西航し四度の航海でキューバ・ハイチ・ジャマイカ・ドミニカ、および南米・中米の一部を発見、探検したと記録にある。

アメリカ大陸が発見される以前に、南北アメリカ大陸に住んでいたエスキモー、アレウトなどを除く原住民の総称をアメリカインディアンと呼んでいる。人種的にはモンゴロイド(黄色人種)に属し、目、毛髪は黒い。すべてベーリング海峡を経てアジア大陸から移動したものとされている。¹⁶⁾これらの人々も日本人に近い人種とみられている。

第一章 人類の誕生と日本人の先祖